

第 40 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2009 年 11 月 21 日～23 日（金沢大学）
セッション討議内容の記録

セッション名： コンパクトシティ	
日付： 11 月 21 日（土）曜日、セッション時間： 13：15 ～ 14：45	
司会者名（所属）： 谷口 守（筑波大学大学院 システム情報工学研究科）	
討 議 内 容	<p>セッション全体：</p> <p>コンパクトシティが各所で政策として取り上げられる一方で、まだ検討が必要な多くの課題が残されている。本セッションでは（22）拡散して住み続けることのコスト、（23）公共施設配置の影響、（24）人口規模と施策効果との関連など、コンパクトシティに関わる広範な観点から発表・議論が行われた。</p>
	<p>（22）佐藤 晃（宇都宮大学）：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 詳細な地域の実態をどの程度反映すべきだろうか（その可能性、および必要性）。 ・ 低炭素化よりも都市維持管理費用の方が効果として見ると実は比重が大きいのではないか（環境コストの単価が小さすぎるという問題もある）。 ・ 都市をコンパクト化することより維持管理内容を改善することで、よりコスト改善がはかれる部分もあると考えられる。
	<p>（23）須山 慎造（東京理科大学）：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ D I D 拡大の実態のうち、公共施設の郊外移転から説明できる部分はそもそもどの程度あるのだろうか。たとえば広域的な都市化の影響の方が強かったりしないだろうか。 ・ 地価の動向や市役所の地区サービス機能の在り方についても今後の課題として含めるべき。 ・ 市町村合併に関連し、広域の中で施設をどうまとめるかという話とリンクできないか。
	<p>（24）牧野 夏樹（京都大学）：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ モデルの仮定が強いため、実際の政策としてこの結果がどこまで展開できるだろうか。 ・ 抜本的なシナリオを検討のために、むしろ理論的なモデル分析に特化すべきではないか。 ・ 全く何も無いところから立地を考えるより、既存の都市パターンを前提にすることも考えた方がよいのではないか。